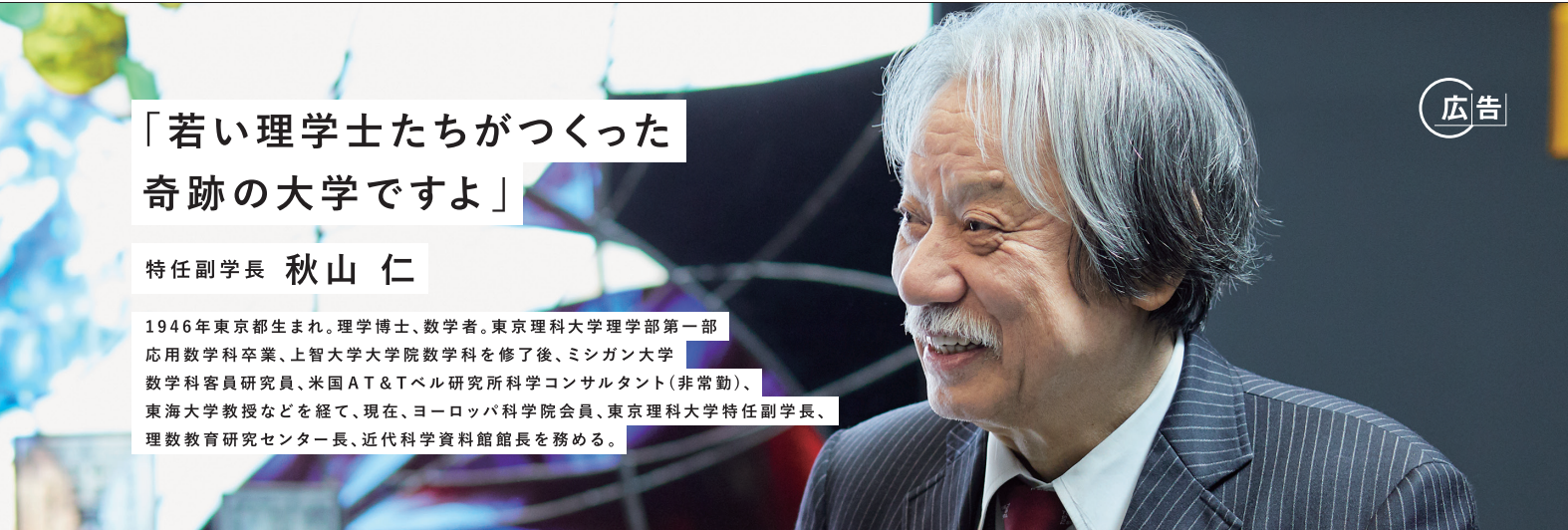




「科学的思考を武器にして活躍するのが本学の卒業生です」

理事長 本山 和夫

1950年東京都生まれ。1972年東京理科大学理工学部経営工学科卒業、アサヒビール入社。2003年執行役員・戦略企画本部長、2010年代表取締役副社長、2011年アサヒグループホールディングス代表取締役副社長、2013年アサヒ飲料代表取締役社長、2015年同社社長退任、同年から学校法人東京理科大学理事長。



「若い理学士たちがつくった奇跡の大学ですよ」

特任副学長 秋山 仁

1946年東京都生まれ。理学博士、数学者。東京理科大学理学部第一部応用数学科卒業、上智大学大学院数学科を修了後、ミシガン大学数学科客員研究員、米国AT&Tベル研究所科学コンサルタント(非常勤)、東海大学教授などを経て、現在、ヨーロッパ科学院会員、東京理科大学特任副学長、理数教育研究センター長、近代科学資料館館長を務める。

理念を貫き、進化する。

2021年に創立140周年を迎える東京理科大学は、変化する社会の要請に応えるべく、経営学部「国際デザイン経営学科」を新設、基礎工学部の「先進工学部」への改称をはじめ、学部・学科再編を進めています。イノベーションの創出、新しい日常の創造、社会的課題の解決に向けて東京理科大学の挑戦に終わりはありません。

21人の若き理学士たちがつくった東京物理学講習所。

本山：東京理科大学には熱い想いというものがあります。東京大学の仏語物理学科を卒業した21人の理学士たちが「理学の普及を以て国運発展の基礎とする」と建学の精神を掲げて創立したわけですが、時代は変わっても、その精神は変わりません。

秋山：平均年齢25歳の若い理学士たちが学校を創立するなど、今では考えられませんか。奇跡の大学と言えるのではないのでしょうか。「若さの前に不可能もなければ、陰影も無い、それは一切を突破する力であり、一切を明るくする太陽である」という与謝野晶子の言葉が思い起こされます。

本山：その後も維持員の先生方、篤志家の方々が創立者の想いを受け継いできま

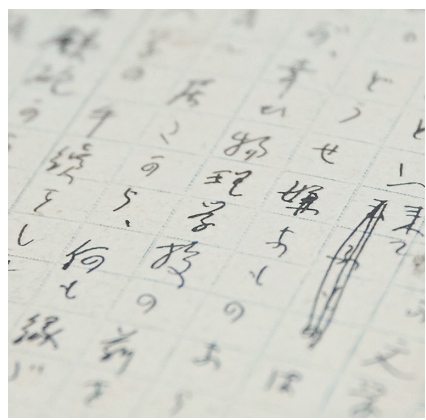
した。私自身も、理科大で情熱を持った先生方に指導していただいたことを誇りに思っており、その恩返しの気持ちもあって、母校の価値向上に貢献するために理事長を引き受けました。

秋山：本学は今年で140周年です。理科大の近代科学資料館では、これまでの実績を展示しています。主なものは、まずは「物理学術語和英仏独対訳字書」です。これは創立メンバーが中心となり刊行されたもので物理用語の統一に貢献しました。また、1891年から1944年の628号まで発行された「東京物理学雑誌」は、日本に最先端の科学情報を広める重要な役割を担いました。世界で初めての乾電池、これは本学で学んだ屋井先蔵という人が発明したものです。新しいところでは、本学の大学院を修了して2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智特別荣誉博士に

よる世界的な業績も展示されています。

本山：過去から受け継いできた伝統のなかでも、理科大の教育の核となるのが「実力主義」と言われる厳格な進級制度です。これが果たしてきた役割は大きいのではないのでしょうか。

秋山：落第制度などと誤解されることもありますが、これは入学した全ての学生に必



夏目漱石による「坊っちゃん」の原稿(複製) (近代科学資料館展示)

ず力を付けさせたいという理科大の意思です。生涯にわたって実力を伸ばせるように、自ら学ぶ姿勢を身に付けるためのものと言ってもいいでしょう。決して獅子が我が子を谷に突き落とす、そんなものではありません。その真逆で手厚く導くということです。

150周年へ、その先へ、東京理科大学が目指すもの。

本山：理科大は、中学・高校の教員を多く輩出することで、建学の精神である「理学の普及」を実現してきました。最近では、教育者や研究者に加え、実業界で活躍する卒業生も増えています。理科大出身者の社会での活躍の様子を秋山先生はどのように見られていますか。

秋山：科学的思考とは、事実とトコトン向き合うということです。自分やその集団にとって都合なことであったとしてもできる力を付けることであり、それが社会での活躍につながっているのでしょうか。

本山：私は実業界にいた人間ですが、会社でも課題が見えないということが非常に多いと感じます。事実を詳細に掴むことなしに、課題を捉えることはできません。科学的思考を武器にして、社会で活躍し

ているのが本学の卒業生であり、それに対する評価・期待が、私学の中で群を抜く就職率に繋がっているのだと思います。

秋山：夏目漱石「坊っちゃん」の主人公は理科大の前身の物理学校を出た数学教師です。正義感の強い熱血教師で徒党を組む悪と戦うわけですが、理科大の気質をよく表していると思います。

本山：創立の頃より日本や社会の発展に貢献してきたのが理科大です。現在も学長を中心に、SDGsに代表される世界規模の課題解決に取り組んでいます。今後も受け継いできた伝統を大切にしつつ、さらに発展させていきたいと考えており、学部・学科再編、キャンパスの再構築に取り組んでいるわけですが、これからの理科大について、秋山先生の考えをお聞かせください。

秋山：理科大では多岐にわたる分野で高度な研究が進んでいます。さらに、分野横断型の研究を全学で進めようとしています。そこから、新しく重要な成果が生まれてくると思います。新時代を切り拓いていた当時のベル研の主任M・ケリーは「不可能を可能にするイノベーションを生み出すためには、異分野の様々な専門家が物理的に近くにいることが何よりも重要」と言っています。



科学技術の進歩と国の発展を願う理科大の歴史や理念を表現したスタンドグラス(近代科学資料館展示)

本山：学部・学科の再編で、神楽坂はサイエンスキャンパス、葛飾はイノベーションキャンパス、野田はリサーチキャンパスと明確な位置付けが行われますが、すべてのキャンパスで各分野を融合した研究とデータサイエンスの活用が推進されます。これはとても楽しみなことです。

秋山：もう一つは国際化です。科学のイノベーションや新発見のためには、広い世界と交流することで、刺激を受けたり、協働することが大切です。

本山：その通りです。そうしたことを推進するためにも、財務的な安定を図ったり、産学連携の枠組みづくりをしてきましたが、まだ助走の段階です。これからも、次代の理科大をつくるための取り組みを教職員一丸となって進めていきます。

TUS 140th Anniversary



東京理科大学
TOKYO UNIVERSITY OF SCIENCE

東京理科大学 Since 1881
140th
Anniversary



〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3 03-5228-8107 (広報部) <https://www.tus.ac.jp/>